

鈴木有郷牧師 説教

7/5/09「イエスは神をアバと呼ばれた」ルカ12:22-34

主イエスは神を「アバ、父よ」とお呼びになりました。それまで神をアバと呼んだ人は主イエス以外に誰もいませんでした。アバとは子供が父親を呼ぶ時に使った言葉です。英語のダディーやパパと同じニュアンスを持つ言葉です。

それは優しさ、慈しみ、力強さ、身近さの要素を持つ存在への信頼を託した呼びかけです。主イエスは、神は自分に自信を無くして意気消沈している子供の肩に手を置き元気づける優しいお父さんのような方だ、そう教えられたのです。

主イエスがアバと呼ぶ前の神は、どこかつかみ所のない抽象的な存在か、それとも近寄りがたい厳格で厳しい存在という印象がただよっていました。しかし主イエスが身を以て示された神は、身近で、暖かく、愛に満ちたお父さんでした。神は私たちがアバと呼ぶことを許し給う慈しみと愛の神です。

ですから、主イエスの神理解を今日読んで頂いたルカ12:22-34に従って要約すれば、次のようになるでしょう。神はあなたのアバ。だから、たとえ正気を失うような不条理に直面しようとも、絶望することはない。死に直面する時も、おじまどうことはない。神は空の鳥、野の百合をも優しく育てくださる。それらの美しさ、優雅さはソロモンの栄華も遥かに及ばないではないか。その神があなたに無関心である筈があろうか。だから勇気を出しなさい。今日というこの日を一生懸命、深く、生き生きと生きなさい。アバなる神は一瞬たりともあなたを離れることはない。

前にもお話したことがあります。私がアバという主イエスの神への呼びかけの意味を実感したのは、40年前にさかのぼります。私は当時シアトルの教会の牧師をしていました。私が就任して間もなく西海岸の一世・二世合同の牧師会が開かれました。私が親しくしていた一人のロスアンゼルスから参加した二世牧師は、常々自分の日本語は子供の日本語だから人前では恥ずかしくてとてもしゃべることができないと言っていました。確かに私はそれまで彼が日本語をしゃべるのを一度も聞いたことがありませんでした。

牧師会が終わりに近づき、最後の祈りの時間となりました。司会をしていた一世の老牧師が、私の友人に日本語でお祈りを願いますと頼みました。私は急に心配になりました。日本語が苦手な友人が突然指名されて困り果てるのではと思ったからです。

しかし彼は臆することなく立ち上がりました。彼はちょっと間を置いてから祈り始めました。その祈りの言葉は今でも深く私の胸に刻み込まれています。「父ちゃん！」と彼は言いました。「有り難う。この人達を有り難う。毎日を有り難う。全部有り難う。父ちゃん、本当に有り難う。アーメン」

牧師会が終了した後、彼を指名した一世の老牧師が深々と彼に頭を下げて言いました。「有り難う。有り難う。素晴らしいお祈りでした。本当に有り難う。」

そうです。「アバ父よ」と日本語の聖書に訳されている言葉は、実は「父ちゃん」なのです。神は私たちが「本当に有り難う。毎日を有り難う。全部ありがとう」と言える「父ちゃん」のように身近な存在なのです。

この信仰こそが、日本という土壌に福音の種を蒔いた内村鑑三を支え、賀川豊彦を支えたのです。日米合同教会の信仰の先達達を支えたのです。この信仰こそが現在という時を生きるあなた、そして私を支える岩です。櫓です。砦の塔です。